

## Ⅲ 「舞姫」指導上の問題

酒 井 為 久

本稿のねらいは、高3「現代国語」の文学教材、森鷗外「舞姫」の指導を実践したときの結果を扱うことによって、そこから、文学教材一般の取り扱いの問題を考える上での示唆を得られるのではないかという点にある。

方法としては、本校高3・三クラスで形態の異なる授業を行ない、その授業の過程で、生徒に感想文を含む各種の記述をさせることにより、授業の効果を判断したり、生徒の読解や鑑賞などの学習程度を把握し、よりよい読解や鑑賞へ導く方策を見い出す手がかりとしようとしたことがあげられる。

### I 指導について

授業の効率や他の教材との関係を考えて、A・B・Cの三クラスとも6時間（3週間）で扱うことにした。指導の仕方をクラスごと、意識して変化させてみたが、厳密な意味の指導過程の異なる組み立てを目指し、その比較に重点を置いたわけではない。大きく分けて、Aでは、生徒の自発的な学習により、生徒の予習などを期待する型をとってみた。Bでは、教師の側の説明を多くし、語句の解釈などは軽く扱う行き方をした。Cでは、古典の訓詁注釈のように、作品の部分朗読とその解釈という繰り返しを行ってみた。

とくに留意したのは、生徒に書かせる記述を種々の形態にし、「舞姫」読解・鑑賞の度合いの評価の材料としても使用できるようにしたことである。また、各時の指導目標にはこだわらず、各6時間で「舞姫」に取り組み、その結果から判明するものはないかという態度でのぞんだ。

次に、指導のあらましを記す。A・B・Cがクラス名で、数字が時数である。数字がゴチになっているのは、その項目を後に取り上げるものである。

- A 1 黙読（精読）しながら、各自、難解とする語句を用紙に記入し提出する。
- 2 前時の作業の続きを行なう。読了時間がそろわないので、終わったものから、「舞姫」の粗筋を書かせ、時間終了とともに提出させる。
- 3 生徒の提出したものに沿って、難解語句の説明や解釈の作業をする。
- 4 前時と同様に、その続きを行なう。
- 5 作品の主題、構成、表現などにつきまとめ味わう。

6 教科書中の参考文「漱石と鷗外」を参照しながら、文学史の説明をする。

- B 1 教師の説明により、文学史上の「舞姫」の価値にふれさせる。
- 2 黙読（通読）にて、難解語句にこだわらず、ともかくも時間中に読み終えさせる。
- 3 一次の感想文を書き提出する。
- 4 教師中心で、難解語句の説明や解釈をする。
- 5 前時と同様に、その続きを行なう。
- 6 テーマを与えて、その答えを書くつもりで、二次の感想文を書かせ提出する。
- C 1 部分の朗読、そして語釈・説明をくり返す。
- 2 前時と同様に、その続きを行なう。
- 3 前時と同様に行なう。
- 4 前時の続きを終え、教師が中心となって、作品の主題や構成などを、後半でまとめる。
- 5 書き方を指示した上で、感想文を書かせ提出させる。
- 6 参考文を参照しながら、文学史の説明をする。

以上の指導をして感じた印象を述べると、生徒の反応が活発であったのは、Aであった。Bは、文学史の説明が作品味読に生かされるまで至らなかったという感じがし、作品に関する知識的なことを、作品と区別した方がよかったと思われた。Cは、それなりに徹底した行き方なので、生徒には明解であったようだが、この作品はすでに完全な古典かという疑問もでてきた。

### II 生徒の記述から

Aの1、において教科書の26ページにわたる、この作品を、難解語句と思うものを用紙に記入しながら、50分で何ページまで読めるか。また、読みの速度と現代国語の成績との関係はどうかということを調べた。難解語句の記入数には、大きな個人差があったが、単純に平均して、1ページ12箇所という数字がでた。教科書にほどこしてある注は、1ページ平均2.5箇所、地名、人名、外国語などを主としているが、それらの他に漢語古語系統のものがよくわからぬとするものが多かった。

◀読みの速度と「現代国語」の成績▶

現代国語成績	5														1	1	1		1					1	1	2	
	4		1												1				2						2		1
	3									1				1		2			3	1	3	1			1		4
	2									1	1	1				1			1	4			1				1
「舞姫」のページ数		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26				

(表中の数は人数)

この表から見て、読みの速度と成績との関連は薄いということができ、また、表は省略したが、難解語句の記入数の多寡と成績との関連も薄いという結果がでている。

**Aの2、において** 通読を終えたものから、時間の範囲内で粗筋を書かせた。時間終了とともに提出させたので、途中までの粗筋のものばかりであった。

(例文1) ドイツからの帰り道、セイゴンの港あたりで、私はドイツ留学中の心に痛く残っている出来事を回顧しはじめる。私は、まわりの人々から感嘆され、賞讃されながら、十九の年にはもはや大学を卒業し、某省の命令でベルリンへ留学する。ベルリンでは、まわりの人々とあまりなじみず、人々から猜疑されたり非難されたりするが、一方では自我にめざめるなどして、日々は過ぎていった。ある日、寺門の前で泣いている一少女に会い、その嘆きをなぐさめなどして少女を家まで送る。こんなことから少女と私との間に、しだいに清らかな愛情がめばえはじめる。しかし、この関係が同郷人らに知られると、私は私の任務を解かれてしまう。私は路頭にまよう。しかし、ここに相沢謙吉なる人物が現われて、私に某新聞の通信員の職を与えてくれる。私は少女の家で生活するようになり、苦しい中にも楽しい日々を送るようになる。

(13ページまで)

これは、一人称形式の筆致をうまくとらえた粗筋として、よく書けているものの一つである。粗筋を書かせてみて、読みを正しく行っているかどうかははっきりすることがわかり、次の例文2で示すような、一次の感想を書かすよりも有効であることを感じた。これは、文学教材一般にも共通して言えることかもしれない。比較のために、あまりよく書けていないものが、どうしてそうなったかという原因を考えるに、

- ア. 読む速度が非常に遅い。
- イ. 内容を読みちがえたり、読解が浅い。
- ウ. 自分の考えに合わせて読む。
- エ. 先入感にとらわれて読んでいる。
- オ. 自分の興味あることのみを目をむける。
- カ. 現在を基準として考えてしまう。
- キ. 作品全体の流れを見ず、部分を見ている。

などがあった。

**Bの3、において** Aの2で粗筋を書かせたと同様に、一読後すぐに、一次の感想文を書かせた。比較的よく書けているのを、次に、例文2で示したが、各自の感想を前面に押し出した感じで、それが正しい読解の上に成り立っているかどうか分からない点で、指導上、困惑を感じた。感想文の基盤が、作品の内容や構成を正しく把握するところにあるとすれば、まず、粗筋を把握するという作業を、的確になさしめる必要があると思われる。

(例文2) 読み進むうちに主人公豊太郎の心の中の闘いが明らかになり、私までが主人公と一体となって悩んでいるような錯覚におちいってしまった。彼が25才になって、自分の現在までの姿を反省し、新しい自分を見出し出したときの気持ちがよく表われている。彼をよく思わぬ人々の手によって地位を奪われてから、エリスとの生活は楽しく充実していく。しかし、大臣が友人相沢を通じて彼を復職させようとした時の、彼の気持ちの中には、以前のような器械的人間となってもよいから、地位を得たいという欲があった。エリスへの愛と自身の名誉との板ばさみに悩む彼の姿は、形こそ異なっても現在のわれわれあるいは今の人々にも共通であろう。最後に相沢の言によって起る悲劇は迫力がある。この小説によって、男性と女性の愛情のちがいがわかった気がする。

一次の感想としては、この程度が最良の部類に属するであろう。「このような古典的要素の入りまじった小説は読みにくく理解しにくい。また、文が長く一層わかりにくくしている。内容としては、簡単であった。愛情、それを投げすて自分の名誉を考えた当時の風潮がよくでていたと思った。」「読んでいて意味がとりにくく、先へなかなか進めない。いやな文章であった。本筋に入るまでのところが長すぎるように思った。文の中の場面を思い浮べることはできた。」というような、簡単な感想を書くのがやっとというものが、3割ほどいたのである。

**Bの6、において** 学習をすべて終えた上で、二次の感想を書かせた。一次の感想を深めるということも考えたが、Cの5の感想文がそれに相当するものなの

で、発展的に感想を書かせようということから、テーマを与えてそれに答えるという形式の文章を書かせた。テーマは、ほぼ次の通り。

1. 「舞姫」のどこに甘美な青春のめざめとまだ明けやらぬ故国日本の暗さとの矛盾が描かれているかを述べよ。
2. 「舞姫」のどこに、どんなふうにか④東洋風武士風なもの④きびしい道義感が描かれているかを述べよ。

(例文3) 1. 豊太郎とエリスの交際はひんぱんになっていき、それを同郷人が速了して舞姫の美しさにおぼれているものと誤解したところ。主人公が自我にめざめはじめたが、所動的器械的人間を作ろうとしていた官長は、独立の思想をいだけて人並みになる男を喜ばなかったところ。2の④、洋行して名をあげ、家を興そうという考え。異国の美しいもの珍しいものに心をまどわされずに役目を果そうとすること。主人公が父の遺言を守り、母の教えに従ったとあるところ。④、主人公の心には、自分を罪人と思う心が満ちていた。相沢は無二の良友だが、豊太郎の脳裏には彼を憎む心が残ったとあるところ。

これは、テーマに対する答としての的確さを欠いているが、作品中にその根拠を求めようとしているところがよいと思う。が、もう少し総合的にまとめて答えるよう工夫することだ。全体として、この形式の感想文からは、まとめる力の不足を感じさせられた。これは、読解を深めるための方策として用いるべきで、鑑賞はより自由に、生徒の内から湧き出るものを記述させるのがよかったと思われた。

④の5、において 感想文の書かせ方として、最も普通のものである。人物関係、舞台、背景、その時代などに注意して書くよう指示しておいた。

(例文4) 現代小説と比較して、心理描写が少なく、くねくねとしたくどさがなくて、少しばかり随筆を読んでいるような気がした。主人公は、ベルリンへ留学したが、ほかの留学生と気性が合わなかった。そして、偶然出会ったエリスと交際を続けているのを理由に、留学生としての権利を剥奪されてしまう。

——中略——

彼の性格の一つの特徴は、目上の人にいわれたことにさからえないという点である。これは彼の弱さを意味し、このことがエリスと別れなければならない運命となってしまふのである。彼は自分に対するまわりの態度について、「わが母は余を生きる辞書となさんとし、わが官長は余を生きる法律となさんとしけん。」

と書いているが、このことに対する彼の抵抗は、ただ留学生の権利を剥奪されるという無意味な結果となってしまうが、このような人物はその時代を受け継ぐことはできても、時代を変革していく人間ではあるまい。そして、彼もその一人としてごく自然な道を歩いていく。それは日本に帰り、出世するという道である。一方、エリスは純情で、彼を心から愛していた。

——後略——

長文なので省略したが、よく読んで書いた感想文の一つである。ここまで到達することは、一般生徒にとって容易でないことも事実で、感想文を整理して、次のような「舞姫」読解の段階を、読みの深浅の度合いに応じて経ていることがわかった。

- ア. 文語文を正しく読みとる。
- イ. エリスの立場に同情したり、共感したりする。
- ウ. 豊太郎の生き方を理解したり、批判したりする。
- エ. 相沢や天方伯の役割りをつかむ。

アは、イ・ウ・エとも関連している基本的な項目である。そこを経て、生徒がまず目を向けるのが後半にあたるイの部分で、それについての感想で終わっている文章も多かった。次に、ウからエと進んで感想を書いたものほど、作品をよく読んでいると認められた。

### III ま と め

「舞姫」は、文語表現が読解していく上の障壁となっている作品で、実際の授業では、解釈作業が中心となり、鑑賞にまで進むことに困難を感じる教材であるが、感想文などにより、生徒が深く読んでいるかどうか吟味することができたという点で、指導しやすい教材であった。生徒各自が、それなりに精読しているので、現代小説の場合のように、一読して感覚的にわかってしまったと思い、後は作品に関連する知識をつめ込むという、軽薄な読みをしなかった点でも指導しやすさを感じた。

文学教材を使って何を教えるという問題は、判然としないところもあるが、この「舞姫」の指導からいえることは、文学教材の内容を深く読む態度を身につけさせることだろうという、平凡な結論である。また、「舞姫」を深く読むとはどういうことかという、作品分析にふれる紙面の余裕がないし、授業においても、そこまで徹底して行なえなかつたうらみが残ったが、作品に対する対し方を身につけさせやすい教材であったことを記して結びとしたい。